

応急対応に従事する地域の防災リーダーの育成を目的とした研修カリキュラムの研究

平成 20 年 2 月 5 日 白土 直樹

論文要旨

本研究は、地域の防災リーダーを対象とした研修会に対する問題意識を背景に、既存の研修会の全国的な状況を把握したうえで、過去の大規模災害事例における地域の防災リーダーの応急対応過程の構造から地域の防災リーダー育成に必要とされる教育ニーズを導き出し、両者を比較することで既存の研修会の改善点を明らかにして、新たな研修カリキュラムの提案を行うことを目的としている。

まず、都道府県の研修会実施状況調査の結果、その平均像は、所要日数 4 日、総研修時間約 20 時間、研修単元 10 で構成されており、さらに研修テキストの分析の結果、防災知識体系の分類として一般に言われる「Knowing Hazard」、「Damage」、「Vulnerability/Capacity」、「Mitigation」、「Preparedness/Response」が万遍なく網羅される形で 23 の教育要素が扱われていた。しかしながら、主催者側の具体的な人材育成の目標像が明確になっておらず、研修カリキュラムも外的要因に基づき策定されていたほか、長期にわたる研修日数や公募方式による参加者募集の結果、リーダーにふさわしくない参加者も少なくないことが明らかとなった。

次に、阪神・淡路大震災における兵庫県西宮市の被災者インタビュー記録から過去の災害事例における地域の防災リーダーの対応過程を分析した結果、地域の防災リーダーの活動は、10 時間、100 時間のフェーズに特有のものであること、発災直後の 10 時間フェーズでは、専ら近隣住民のなかで活動的かつ声が大きく人に指示することが得意な人がリーダーの役割を担い、日頃のつながりを基礎として自ら率先して、あるいは周囲の人の協力を得て、近隣住民の安否確認や生き埋め者の救出活動、要援護者対応、二次災害の危険性の周知といった、人命に直接関わる緊急性の高いニーズに即応していたこと、その後の 100 時間フェーズでは、普段から地域住民や地域内組織とのつながりを有し、世話好きで面倒見のよい人がリーダーの役割を担い、リーダーをサポートする人々や組織の協力を得ながら、地域内に存在する資源や、つながりによって外部からもたらさせる有益な資源を活用して、避難所内で発生する様々な問題やニーズへの対応や、高齢の自宅避難者に対する食料や水の供与などの活動を行っていた。

このリーダーの災害対応過程の構造から、「地域の脆弱性とリソースの理解」、「災害時に地域内で発生する被害とその対応方法を理解・習得」、「組織運営のあり方とリーダーの資質の理解・習得」、「災害時に行政から提供されるサービスの理解」、「災害プロセスとリーダーの役割の理解」の 5 つの教育ニーズが明らかとなり、既存の研修会における教育要素と比較した結果、既存の研修会には「関連性」、「実践性」、「地域性」の 3 つの要素が欠損あるいは不足していることが明らかとなった。

提案する新たな研修会では、内容を上記の 3 つの要素と 5 つの教育ニーズに絞るとともに、より多くの地域住民に研修会を受講する機会を提供するために、実施主体を市町村

や既存の地域団体等と想定したうえで、経費をかけず外部講師を呼ばずとも実施できるよう、標準的な研修会運営要領とテキストを作成、配布するとともに、1日で研修会が完了できるプログラムとすることを提案、その具体的内容を示した。